



シンポジウム 社会学 v.s. 建築 v.s. アート いま「空間の自由」を問う - 社会 / 建築 / アートの交点 -

2006年9月2日(土) 14:30~17:30 せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

目次

1. はじめに
2. シンポジウム要旨
 - 1) 「空間管理」のパラドックス
- 「安全」を囲い込めない住空間-
 - 2) 空間の実践
 - 3) 「パラドックス(概念)」から
「トレードオフ(現実)」へ
3. パネリスト略歴
4. 学際研究会*1
5. 関連出版企画

「空間管理」のパラドックス - 「安全」を囲い込めない住空間 -

安全 (security) が求められる社会にわれわれは生活している。安心して、快適な生活を可能にするために安全が求められる(草の根セキュリティ)。しかし、安全を可能にするためには、空間そのものを監視状態に置かなければならない。つまり、われわれは常に見張られていなければならない。自らのプライバシーと引き替えに、安全な空間=監視された空間で、生活の安心や快適さ、利便性を甘受している。

近代的な価値観に即するならば、ここには「自由 \leftrightarrow 不自由」の対立関係があるはずである。しかし、現実的には安全な空間=監視された空間のなかでこそ、安心して自由に振る舞うことができるとみなされる。「安全な空間」=「空間の不自由」=「自由な振る舞い」という関係が成立する。なぜ、このような近代的なプライバシーや自由についての考え方と矛盾する関係が成立するのか。そのメカニズムを具体的な空間の姿をとおして解き明かす課題に直面している。

こうした矛盾する空間の典型的な形態が、セキュリティ・タウンやセキュリティ・マンションといった、一種のゲーティッド・コミするための建物の配置、監視カメラ、ゲート、センサーシステム、警備員による巡回・・・といった建築テクノロジーやICT (Information & Communication Technology) を駆使した集住の空間がすでに数多く作り出されている。空間は、常にテクノロジーと接続され、純粋なプライバシーの空間はもはや物理的に成立しなくなっている。さらに、そこでは往々にしてコミュニティが重視され、防犯パトロール、防犯マップづくりといった、安全のための住民による自助努力が動員される。

一見して「安全な空間=安心して生活できる空間」を可能にしているかのような、こうした空間は、安全を求めて空間を囲い込もうとすればするほど、反対に自らの住む営みの自己否定に至ってしまう可能性すらもっている。まず何よりも、完璧な安全の空間を作り出すことは不可能に近いし、住む空間のために駆使されるセキュリティ・テクノロジーは、完璧な安全を目的としえないからである。そして、囲われた空間は、安全が排他的に占有された空間であり、われわれ以外の人がと集まって住む可能性を放棄してしまう可能性すら有しているからである。この事態は、安全といったときに閉塞していく「空間の不自由さ」に他ならない。

佐幸信介 (さこうしんすけ)

主催

関西学院大学 21世紀 COE プログラム
せんだいメディアテーク

